HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	長谷川雄太郎研究・その3 ： 『日語入門』初版の成立過程に関する考察
Author(s)	中村, 重穂
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 23, 1-18
Issue Date	2020-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78165
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJLIES22_01_nakamura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本語・国際教育研究紀要　第23号　(2020)［研究論文］

長谷川雄太郎研究・その３
―『日語入門』初版の成立過程に関する考察―

中　村　重　穂

要　旨

明治時代（清朝末期）の日本語教師・長谷川雄太郎（1865～1904）執筆の『日語入門』初版が従来の２冊に加えて新たに東京外国語大学附属図書館で確認された。これらの３冊は同一日に印刷されていたが、字形や文に相違や脱落がある。そこで、小論では、これらの初版の成立過程を書誌学的に考察した。その結果、かかる相違の大きな原因は複数の印刷職人の関与と、活字の違いによるものと判断された。最後に、初版とそれ以後の版で印刷日・印刷会社が異なることを指摘し、これらの問題に関するさらなる解明の必要を説いた。

〔キーワード〕長谷川雄太郎、『日語入門』、和成堂、秀英舎

1．問題の所在

明治時代の日本語教師（清国広州同文館日本人教習）・長谷川雄太郎（1865(慶応元)～1904(明治37)年・図１）の手になる日本語教科書『日語入門』は、1901(明治34)年２月７日に発行された[1)]。印刷人は川名保五郎、発行所は善隣書院、印刷所は和成堂である。印刷人と印刷所の住所は同一であるので、川名保五郎は和成堂の経営者と推定される。

図１：長谷川雄太郎肖像
（長谷川家ご提供、作成年不明）

この1901(明治34)年版の『日語入門』奥付にも、現存する再版、四版、六版の奥付にも初版とは書かれていないが、小論ではこれを便宜上初版と呼ぶことにする。この初版は、従来２冊（神奈川県横浜市の長谷

川家所蔵本、及び東京都立中央図書館特別文庫室実藤文庫所蔵本）が存在していたが、2017(平成29)年、新たに東京外国語大学附属図書館所蔵本が確認された。この刊本も、1901(明治34)年２月７日発行で、３冊とも1901(明治34)年２月３日印刷と奥付に記載されている。

ところが、現代ではおよそ想像しがたいことであるが、同一日の印刷・発行であるにもかかわらず、３冊の間には活字（字形）の違いや文字・文の欠落等が見られる。そこで、小論では、３冊の校合を行った上で、当時の印刷技術等も参照しつつ、初版の成立過程の考察を試みた。具体的には、３冊の初版が奥付にある通り同一日に印刷されたとすれば如何なる順序で印刷されたのかを、『日語入門』に書誌学的分析を加え推定せんとするものである。

ここで言う書誌学的分析とは、書物の「形式的な事項に関して、わかりやすくいえば誤字、脱字、乱丁、落丁などの有無、形態的な事項に関して他の図書・書物との異同などについて記述」し、それによって「その資料のもつ意義と位置づけを行う」〔廣庭・長友（1998：24-25)〕ことである。『日語入門』にかかる分析が必要な理由は、第一に、既述のような初版の異同が判明しており、これらを校合してその成立を解明することによって（もし相違が確定されるなら）定本が確定され、併せて当時の日本語教科書の印刷工程―さらに広く言えば近代文献成立過程―を窺い知ることができるからである。このような定本の確定は、日本語教育史の今後の（基礎）研究にとって重要性を有するものである。

第二に、上記のように定本が確定されれば、今後改めて『日語入門』の成立過程の研究、分けてもこれまでのところ着手されていない諸本校異に基づく『日語入門』の設計思想、及び長谷川雄太郎の日本語教育思想の解明に基礎的な情報が提供され、大いに資するものとなることが挙げられる。それは、従来、植民地台湾に於けるグアン式直接法の導入と展開、あるいはその周辺状況に比較的重点が置かれがちだった明治期日本語教育史研究の対象領域と視野を広げることにもなると思量される。

第三に、これは極めて遺憾な事態であるが、現状では利用者が参看しやすい実藤文庫所蔵本の初版が少なからぬ欠損を含んでいる[2)]結果として、その欠損すなわち史料上の瑕疵に気づかぬ（あるいは意図的に無視した可能性も考えられる）杜撰な研究が行われた事実がある。しかも、そのような研究が流通していることで日本語教育史研究に大きな弊害をもたらす危

険性があるため、厳正な書誌学的分析を行って、先行研究の問題点を明らかにし、将来の研究を誤らせないようにしなければならないのである。小論の書誌学的分析が有する意義と必然性をまとめるなら、それは以上の三点に尽きる。

小論では、長谷川家所蔵本を長谷川本、実藤文庫所蔵本を実藤本と略称し、東京外国語大学附属図書館所蔵本を外大本と略称する。また、『日語入門』からの引用は、課番号漢数字をアラビア数字で表記する。

なお、長谷川本、実藤本の、その他の諸版[3)]との校合については既に中村（2015）、中村（2016）で行っているため、小論での校合はあくまでも初版の３冊のみとし、必要に応じて適宜他の版を参照した。

また、先行研究は中村（2015）、中村（2017）で概観しており、その後の管見の範囲では新しい研究は見られないため、小論では省いた。

2. 外大本の書誌情報

外大本は、縦22.8cm、横15.4cmの四ツ目綴じ和装本で、表紙の色は縹色である。表紙には題簽が貼られているが、背表紙はなく、背の綴じ部の上に標題が書かれている。

内容は、「例言」、「日本仮名字体」、及び本文134葉半に奥付半葉（＝135葉）で全90課から成り、長谷川本と同一であるが、外大本は「例言」の前に見返しが一枚なく、実藤本は「例言」がなく、本文にも一部欠損があるため、これらの点は同一ではない。135葉右半双下部に「大正貳年貳月拾九日現在圖書」という印が押してある。

奥付は、３冊とも同一であるが、外大本は表紙裏に1901（明治34）年２月28日付で発行所の善隣書院から東京外国語学校に寄贈されたことを示すシールが貼られている。印刷・発行部数は不明である。

以上が外大本の書誌情報である。

3. 『日語入門』初版に見られる字形について

『日語入門』初版の字形は、３冊とも一字種一字形ではない、一字種多字形のものが多く認められる（→後述）。横山（1992：324）によれば；

> 「明治新政権の誕生が一八六八年であり、実際に活字印刷が普及しだしたのが明治一〇年前後である」

ので、『日語入門』も活字印刷されたことはほぼ疑いがない。

そして、一字種多字形であることから考えると、『日語入門』初版は、鋳造活字／鉛活字ではなく木活字によって印刷されたと推察される。同一課の同一文字でも、出現箇所によって寸法が異なること（例：第８課「ノ」に大きさ0.3cm×幅0.2cmと大きさ0.4cm×幅0.3cmが混在し、第14課「ガ」に大きさ0.6cm×幅0.4cmと大きさ0.6cm×幅0.5cmが混在する）も木活字による印刷を傍証するものと考えられる。

字体は、手書き楷書の明朝体が用いられている。また、冒頭の「日本仮名字体」以外はひらがなが出現せず、本文は欄外註記、ルビも含め漢字カタカナ交じり文である。「日本仮名字体」のひらがなは、連綿体の影響をとどめている字もあり（「し」等）、ひらがなの下には、もととなった漢字も書かれているが、それらは手書き連綿体で印刷されている。

4. 相違箇所の分析

4-1. 異字形の種類

『日語入門』初版３冊の校合より、相違点は文字から語／文の有無、行位置、約物に及ぶことが明らかとなった。本節では、それらのうちの文字＝異字形について明らかにする。異字形が認められた字種(異なり字形)は125字である。この中には、例えば、「腕」の「宛」部と「碗」の「宛」部のように旁の一部／部首として共通するものもあるが、字種としては別に数えた。それらを表1に示す。これらの中のワープロ入力できない漢字／部首については、必要に応じて入力可能な部首とそれ以外の部分を分けて入力するようにした(例：「厂＋艮」)。

また、漢字の止め・はね・払いや、画の引き方の違いなども、ワープロソフトに技術的な限界があるため、差し当たり全体像を示すために細部については入力可能な文字を用いるか、または省略した。

表1：『日語入門』異字形文字一覧

1	は	26	蝶	51	雨	76	引	101	枝
2	ハ	27	翡	52	着	77	来	102	養
3	ほ	28	ネ	53	鐵	78	置	103	四
4	ホ(連綿体)	29	様	54	處	79	聞	104	厂＋艮
5	へ(連綿体)	30	邉	55	支	80	棄	105	攪
6	ル	31	但	56	安	81	學	106	求
7	を	32	説	57	民	82	教	107	對

8	卜	33	寫	58	閒	83	席	108	何
9	音	34	凡	59	査	84	弱	109	條
10	鬱	35	己	60	旅	85	度	110	機
11	獵	36	惡	61	隅	86	棒	111	承
12	井	37	往	62	香	87	強	112	構
13	塲	38	歩	63	具	88	鉢	113	精
14	橋	39	酒	64	報	89	鎌	114	候
15	称	40	籠	65	御	90	幾	115	傷
16	属	41	館	66	西	91	年	116	葉
17	喉	42	云	67	本	92	歳	117	語
18	腕	43	植	68	陶	93	箱	118	弟
19	障	44	碗	69	乗	94	値	119	奥
20	叚	45	庭	70	寒	95	雲	120	區
21	懐	46	就	71	乘	96	冊	121	發
22	鍋	47	算	72	久	97	部	122	麹
23	鑿	48	思	73	湯	98	雇	123	板
24	象	49	降	74	蜜	99	張	124	権
25	兎	50	層	75	第	100	掌	125	所

4-2. 文字・語彙・文の誤植や欠落

本節では、異字形ではなく、誤植や欠落、行位置のずれを含め広く表記の違い（と見られるもの）について校合の結果を明らかにし、文字、及び文について表２（→p. 6 ～p. 7）に示す。表中の「∅」は、その文字／文の欠落を示す。項目は出現順である。原文の傍点や下線は省略した。

この他に、相違してはいるが判断に迷うものが五つあった。それらについては表２下部に※で記しておいた。これらはいずれとも読めるため、ルビの変更なのか誤植なのか判断を保留した。

4-3. 約物等の誤植・欠落

本節では、前節同様、異字形ではなく誤植や欠落を含め広く表記の違い（と見られるもの）のうち、その他の、濁点・ルビ・細書の有無や、約物の誤植・欠落等の出現数を表３（→p. 8）にまとめた。これらは、各本ごとに分けず、3 冊の間での何らかの相違があった項目をまとめて計算した。

表２：誤植・脱落・行位置ずれ箇所一覧

	外　　大　　本	長　谷　川　本	実　　藤　　本
1	日本仮名字体１ページ最終行「井・ノ・オ」	日本仮名字体２ページ１行目	同左
2	熱（実字では１画目から８画目が「幸」）	同左	旁部の「丸」が「九」
3	ルビ「アフヒ」	ルビ「アサヒ」	同左
4	ルビ「ジップン」	ルビ「シップン」	同左
5	ルビ「ハウガク」	同左	ルビ「ホウガク」
6	ルビ「ギャクフウ」	ルビ「キャクフウ」	同左
7	ルビ「グ」	ルビ「ク」	同左
8	ルビ「クヮウ」	ルビ「カヮウ」	同左
9	ルビ「フクラハギ」	ルビ「フクラハキ」	外大本に同じ
10	ルビ「ハダヘ」	ルビ「ハタヘ」	外大本に同じ
11	吊桶	吊	実藤本ページ欠落
12	ルビ「テウヅダラヒ」	ルビ「チウヅダラヒ」	実藤本ページ欠落
13	ルビ「ドンブリ」	ルビ「トンブリ」	実藤本ページ欠落
14	ルビ「ツヱ」	ルビ「ツエ」	実藤本ページ欠落
15	ルビ「フクロフ」	ルビ「フクロヲ」	外大本に同じ
16	騾子	騾	同左
17	ルビ「ザイモク」	ルビ「サイモク」	同左
18	玉器舗	同左	王器舗
19	ルビ「テウコク」	同左	ルビ「テフコク」
20	烏木卓	鳥木卓	外大本に同じ
21	ガ（助詞）	カ	同左
22	以接テ字〜	以接ヲ字〜	同左
23	ルビ「テツパウ」	ルビ「テツホウ」	同左

24	デ(助詞)	テ	同左
25	居マスカ	居ヤスカ	同左
26	敬語	衆語	同左
27	( )記内語、畧之亦可、～	( )記内語ハ畧之亦可、～	同左
28	擱	木＋閣	外大本に同じ
29	拂塵	塵拂	外大本に同じ
30	御座イマスカ	御座ノマスカ	外大本に同じ
31	杖	枚	外大本に同じ
32	ヨウ	ヨク	外大本に同じ
33	机ノ上ニ～	机∅上ニ～	外大本に同じ
34	裝	「丬」の3画目と4画目が脱落	外大本に同じ
35	ルビ「ヱ」	ルビ「エ」	同左
36	小使、使喚人也、	∅	同左
37	不知怎的没有消息	不知怎麼没有消息	外大本に同じ
38	那個人不知怎的一遭兒也～	那個人不知怎麼一遭兒也～	外大本に同じ
39	達	8画目が脱落	同左
40	リ字發聲變做促音　サス、叮也	∅	同左
41	アリス	アリマス	同左
42	ルビ「ゴサ」	ルビ「ゴザ」	外大本に同じ
43	ルビ「ツツウ」	ルビ「ヅツウ」	同左

※相違しているが誤植か読み替えかの判断が困難なもの
・鰥：外大本「ヤモヲ」、長谷川本＝実藤本「ヤモメ」(15葉「身体」)
・応接所：外大本「オウセツジョ」、長谷川本＝実藤本「オウセツショ」(18葉「宮室」)
・金杓子：外大本「カナジャクシ」、長谷川本「カナシャクシ」、実藤本ページ欠落 (23葉「食事道具」)
・御出ナサイ：外大本ルビ「御出(イデ)ナサイ」、長谷川本＝実藤本ルビ「御出(デ)ナサイ」(107葉、第69課)
・香港通ヒ：外大本ルビ「香港通(ガヨ)ヒ」、長谷川本＝実藤本ルビ「香港通(カヨ)ヒ」(121葉、第81課)

表３：約物等の延べ誤植・欠落数

項　　目	出現数
濁点の有無	17
傍線欠落	13
ルビ欠落	7
句点と読点の交替	2
傍点の有無	2
読点の有無	2
細書の有無	1
括弧の欠落	1
傍点の位置変更	1

以上が相違箇所の概要である。

5.　初版各本に於ける相違箇所の出現数について

『日語入門』初版の３冊の、表１～３の相違のうち、特に漢字（表１）については、一つの文字（字種）が複数回出現している。その全てを示すことは紙幅の制約上不可能であるが、幾つかの例を示す。異字形には下線を付し、提示順序は左／上から外大本―長谷川本―実藤本とする。

例１：我是三年賦閒―我是三年賦間―我是三年賦間（87葉、第52課）

例２：返シテ来イ―返シテ來イ―返シテ來イ　　（109葉、第71課）

例３：書物ノ類ハ一册二册又ハ九冊十冊ナドト云ヒマス
　　書物ノ類ハ一册二册又ハ九册十册ナドト云ヒマス
　　書物ノ類ハ一册二册又ハ九册十册ナドト云ヒマス
　　（123葉、第82課）

例３については、外大本のみ一文中で同一漢字の字形が異なる。

このような例と、既出の表２及び表３も含め３冊に出現する相違箇所の総数は延べ415に上る。これらの中には、表２で幾つか明らかにしたように、３冊の間で全て異なるものと、いずれかの２種類では同じであるが１種類のみ異なるもの、及びいずれかの種類でテキストが欠落しているもの（判読不能も含む）がある。それらを表４に示す。

表４：『日語入門』３冊の相違形態分類

相違箇所分類	出現数
３冊の全てに於いて異なるもの	28
外大本と長谷川本が同一で実藤本のみ異なるもの	11
長谷川本と実藤本が同一で外大本のみ異なるもの	284
外大本と実藤本が同一で長谷川本のみ異なるもの	70
外大本と長谷川本が異なり実藤本に脱落があるもの	18
外大本のみ記述があり長谷川本と実藤本に記述がないもの	4
合計	415

これら以外の相違形態は認められなかった。

次章では以上の分析をもとに、当時の印刷技術も勘案しつつ『日語入門』初版３冊の成立過程について考察する。

6. 『日語入門』初版各本の成立過程に関する考察

6-1. 明治期の印刷技術

既述のように『日語入門』初版は、木活字で印刷されたものと推定される。その点を明治期の印刷技術の展開を参照しながら検討したい。

田中（1999：39）は；

> 「明治７年頃はまだ活版印刷は普及していなかった。はじめは和綴じ本、木版、木活字であり、1880(明治13)年には板目木版のあとで電気版をとる方法が使われた。こうした技法は昭和初期まで続いたという。」

と説明している。また、田中（1999：43）によると、1903(明治36)年「野村宗十郎が、母型製作者宇佐美豊吉の協力をえて、初めてポイント活字を製作した。」とされている。さらに、

> 「1876(明治９)年には秀英舎が、佐久間貞一、保田久成らによって京橋紺屋町に創業される。…(中略)…1881(明治14)年、秀英舎は鋳造部を創設し、活字の自家鋳造を開始する。」
>
> 〔田中（1999：45-46)〕

とあるので、初版の刊行が1901(明治34)年で、既述のように同一課の同一文字でも出現箇所によって寸法が異なる『日語入門』初版が鋳造ポイント活字では印刷されていないことが明らかであり、筆者の推定(＝木活字の使用)は裏付けられたと言える。

とすれば、同じ文字でも異なった活字で印刷されるのは不可避な事態であったと考えられる。それでもなお、３冊の同じ初版で、同一箇所に異字形が生じたのはなぜかという問題は完全には答えられていない。次節では、これまでの分析結果を踏まえて、この問題を考えてみたい。

6-2. 異字形出現過程に関する考察

あらためて表１～４を見ると、外大本は他の２冊より特異に字形の異なりが大きいことが分かる。特に表４からそのことが明らかである。

加えて、表２に掲げた43箇所を教科書ごとの正誤で分類すると外大本の特異性はより明瞭になる。以下の表５を参看されたい。「∅」はテキストの欠落を表す。これらの分類以外のものは見られなかった。

表５：誤植・脱落・行位置ずれ箇所一覧の正誤別分類

外大本	長谷川本	実藤本	該当箇所数
正	正	誤	4
正	誤	誤	18※
正	誤	正	13
正	誤	∅	4
誤	正	正	2
誤	正	誤	1
行ズレ			1
合計			43

※長谷川本・実藤本に文が欠落している２箇所を含む。

以上の表４と表５から、外大本は、他の２冊とはかなり異なる形で印刷されたことが判る。同時に、他の２冊でも長谷川本のみ異なる箇所が70、実藤本のみ異なる箇所が11ある。また、長谷川本は誤植が多く、外大本と比較して長谷川本が誤っている箇所は35あるが、その逆は３しかない。実藤本と比較すると長谷川本の誤植は13箇所である。

かかる相違が生じた過程を推察する手がかりは、外大本に存在するが他の２冊に存在しない表２-36の「小使、使喚人也、」（110葉・第72課）及び表2-40の「リ字發聲變做促音　サス、叮也」（118葉・第78課）の２文で、両者とも本文の上部欄外註記である。これらが長谷川本と実藤本にないということは、版組の際に印刷職人[4)]が活字を組むのを怠ったということであり、ここから外大本と、長谷川本、及び実藤本の植字を行った印刷職

人が異なる人物であったと推定することができる。

勿論、これが唯一の可能性ではなく、印刷職人は同一人物であったが、複数（ここでは３組または２組）の組版を製作する際に一つの組版にしか上記欄外註記の植字を行わなかったという推定も可能である。

ただ、表２を改めて見ると、長谷川本は上記２箇所以外に文字／語の脱落が見られる。表２-11で外大本の「吊桶」（21葉「家具」）が長谷川本では「吊」のみ、表２-16で外大本の「騾子」（32葉「獣」）が長谷川本では「騾」のみ、表２-33で外大本の「机ノ上」（98葉・第63課）が長谷川本では「机　上」になっている。かかる点から、組版は同一でも印刷職人は異なると考えることには一定の妥当性があると考える。

加えて、表１で長谷川本と実藤本が同一で外大本のみ異なるものが284箇所あることから、長谷川本と実藤本は、同一の組版を下敷きにしつつ一部活字の組み替えが行われた＝それらが長谷川本と実藤版の間で異なる合計109箇所に反映しているという推定も成り立ち得る。

以上から、まずは同一日に印刷された３冊の初版の相違は、印刷職人の違いに帰せられると推定される。しかし、その他の可能性として、むしろ３種類の組版が３台（以上）の印刷機で別々に印刷されたこと、さらには同一印刷日に同じ印刷機で時間差を伴って印刷されたことも推定可能である。このうち、後者については1901（明治34）年２月３日の状況の検証が現段階では困難なので、これ以上の考察は不可能である。

ただ、前者については、当時の印刷会社の規模から推定する可能性があるので、以下では筆者の実地調査をもとにこの点を検討してみたい。

6-3.　和成堂に関する調査と考察

6-3-1.　和成堂の位置

『日語入門』初版を印刷した和成堂は、奥付によれば東京市麹町区隼町22番地にあった。当時の地図（東京郵便局編（1907））を図２に示す。22番地は、図中の「隼町」の東京衛戍病院の区画とその下（実際の方角では西側）の道路の中央部に矢印で示した「22」と書かれた場所である。現在の住所では東京都千代田区隼町３番16号にあたる。

この隼町の現在の区画は明治時代と同じであり、東側に内堀通りが、西側に北から南に国道20号線から国道246号線に抜ける道路が走っている。北端は、東にホテルグランドアーク半蔵門が、西にファミリーマート半蔵

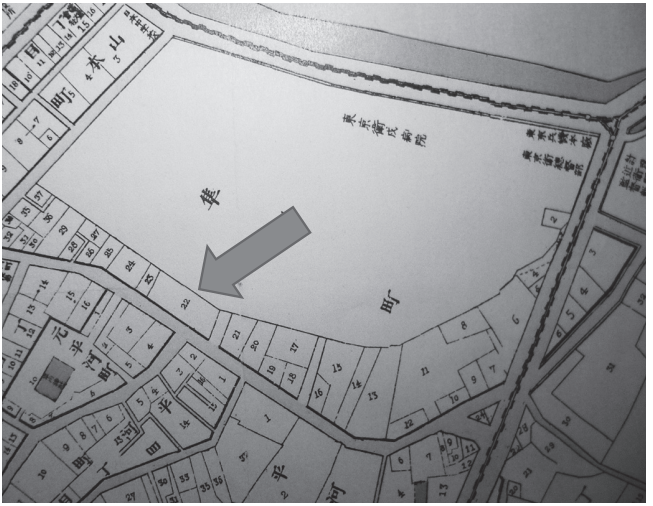

図２：東京市麹町区隼町22番地地図（矢印箇所）

門駅南店があり、南端に最高裁判所が、中央部分に国立劇場が立地している。３番16号は、ほぼ上掲地図の22番地の区画に相当し、現在は住友半蔵門ビルが建っている。厳密な実測ではないが、縮尺から概算すると正面幅約68m、奥行き約24m、敷地面積約1,500㎡である。下に現在地の写真を載せておく。

写真：和成堂跡地（現・住友半蔵門ビル、筆者撮影）

6-3-2.　明治末期の印刷工場の実態

『日語入門』が印刷された明治末期の印刷技術・印刷機について、印刷

製本機械百年史実行委員会（1975：21）に；

「明治33年、1900年つまり20世紀を迎え、外国機も続々と輸入されるようになった。国内メーカーも増えてきた。…（中略）…そのころの印刷機は手まわしと動力がけとあった。」

と書かれている。この「動力」は蒸気機関であり、上掲書によると；

「クランクモーションを円運動に変え、カウンタシャフトにより天井からベルトで各機械に動力を取った。」

とあるので、このような設備はかなり大きかったことが想像される。

また、「手まわし」は「レバーを引いて加圧する機構」と書いてあるが、機械の大きさについては不明である。この他に足踏み式の印刷機もあったようで、上掲書には「足踏式活版印刷機（明治後期）」のイラストが掲載されている（→後掲図３）。上部にあるローラー部分で印刷すると考えると、最も大きいＢ０版（＝1030mm×1456mm）がこの部分に入るなら機械の大きさは最大で高さ３m、幅２m以内になると推定される。

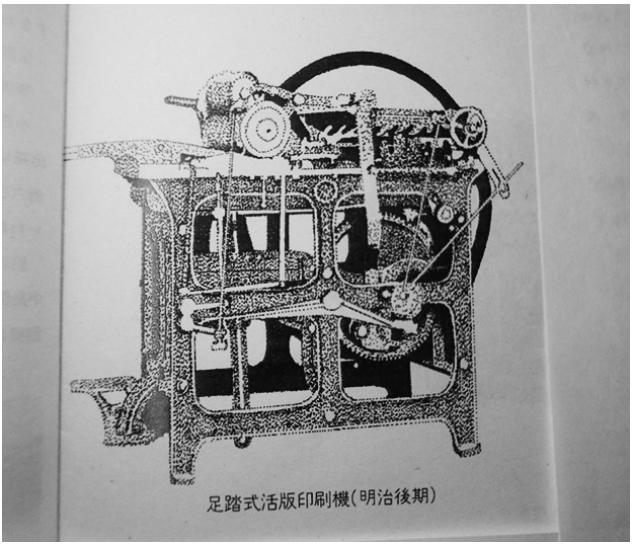

図３：足踏式活版印刷機（明治後期）
（印刷製本機械百年史実行委員会（1975：21））

この推定の傍証となるものとして、熊本県の熊本日日新聞社新聞博物館に所蔵されている足踏式活版印刷機（1885年以降製造）の実測値を示しておく。[5)] 同館によると、長さ115cm、幅98cm、台座を含む高さ121cmとの

ことであり、上記推定値の範囲に収まることが分かる。

このような足踏式印刷機の操作については、上掲書に；

「当時の職人は脚絆をつけて旅人のようないでたちで、足踏み機を動かしたものである。こういうスタイルは関東大震災までは、印刷工場の風景であった。」

と書かれているので、おそらく和成堂での印刷作業もこのようなものではなかったかと思われる。

さらに、当時の印刷工場の情景について、横山（1992：383）に；

「大正八年頃の古老の話の続き。『当時の工場は大抵、下が機械場で二階は植字場が多かった。したがって植字場の者を総称で“二階の者”といっていた。その真黒な二階に上ると八畳敷の座敷のあとに文選の馬があり向かいあって植字台があった。』」

と描かれている。

以上より、敷地面積と前述の機械の大きさに関する推定から和成堂工場内に印刷機を複数台設置することは可能であったと思われる。

7. 結論

前章までの考察から、以下のような結論が得られると考えられる。

⑴外大本と長谷川本は、両者の印刷時期に時間差がないとすれば、異なる印刷職人が版組を行った。

⑵実藤本は、長谷川本と同じ箇所が多いことから長谷川本と同じ印刷職人が版組を担当した可能性があるが、外大本と同じで長谷川本と異なる箇所もあることから、一部外大本を担当した印刷職人も版組に関わっており、このことは誤字・欠落の分布からも傍証される。

⑶3冊とも異なる印刷職人が同じ字形を含む活字を共有しつつ別々に版組を行った可能性、及び3冊とも全て一人の印刷職人が、異なる字形を含む活字を用いて、一度に3組（以上）の版組を行ったことも考えられるが、長谷川本・実藤本に於ける2箇所の文の欠落を勘案すると、これらの可能性は否定できると思量される。

⑷3冊の印刷日が同一という奥付の記述は事務処理上のもので、実際には3冊は全く別々の日に印刷製本された可能性も否定できない。

以上を小論の結論としたい。

8. 残された問題と今後の課題

前章で一応の結論を提示したが、『日語入門』初版３冊に残された問題について述べ、併せて今後の課題を示しておきたい。

8-1. 残された問題⑴：複数の印刷日

既述のように初版３冊には、「明治三十四年二月三日印刷」と記載されている。しかし、現存する再版、四版、六版の奥付ではいずれも「明治三十四年二月一日印刷」となっているのである。これを如何に解釈するかがまず大きな問題となる。考えられる可能性としては；

１．再版、四版、六版の日付が単純な誤植である。

２．初版の日付が実は誤植（＝初版の実際の印刷日は２月１日）であった。

３．初版に２月１日印刷版（未確認）と２月３日印刷版の二つが存在する。

の三つが挙げられる。

8-2. 残された問題⑵：印刷会社の変更

第二の問題として、再版から印刷所が変わっていることがある。初版の印刷所は和成堂であったが、再版以降の印刷所は、「同市〔東京市－引用者註〕牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　秀英舎第一工場」となっているのである。この「秀英舎」とは大日本印刷株式会社の前身であり、現在の東京都新宿区市谷加賀町１丁目には大日本印刷株式会社の本社が存在する。この印刷会社の変更を如何に考えるかも問題となる。

単純な契約の終了とも考えられるが、和成堂が事業を継続できなくなった可能性や、あるいは既述のような初版の誤植を問題視した長谷川雄太郎が、和成堂と契約を解除し秀英舎と契約した可能性も考えられる。

さらにこの問題へ見通しを難しくしているのは、長谷川が初版刊行後の1904(明治37)年３月４日に死去し、その後５月25日に再版が刊行されたという事実であり、ここからは再版以降の印刷契約を誰が、どのように行ったのかも明らかにされる必要があると思われる。

以上が、今回の研究から浮かび上がった、残された問題である。

8-3. 今後の課題

長谷川雄太郎研究の課題について、筆者は、中村（2015：20）で；

ａ．長谷川本を含めた『日語入門』諸本の書誌学的・文献学的分析

b．吉岡（2002）の考察を引き継ぐ、現代日本語教科書の“源流”としての『日語入門』の特長の分析
c．『日語入門』草稿に見られる修正箇所の洗い出しと修正点の考察を通した長谷川雄太郎の教科書作成方針の解明
d．長谷川家所蔵の諸史料、特に『日語楷梯』との比較による『日語入門』成立過程の解明

の4点を挙げたが、中村（2016）でdに、中村（2017）でbについて筆者なりの解答を示した。小論では、初版のみという制約はあるがaについて解答を示したと考える。今後は、残るcについて研究を進めるとともに、未確認の三版、五版、及びその他諸版の探索も行いたい。

註

1）「例言」末尾に「庚子晩冬」と書かれているので、1900（明治33）年に原稿は完成していたものと見られる。
2）この欠損については中村（2015：8-10）に詳述した。
3）外大本を含めて現在存在が確認されているのは以下の6冊である。

	所　　蔵　　先	版	発行年月日
1	長谷川家	（初版）	明治34年2月7日
2	東京都立中央図書館実藤文庫	（初版）	明治34年2月7日
3	東京外国語大学附属図書館	（初版）	明治34年2月7日
4	北海道大学附属図書館札幌農学校文庫	再版	明治37年5月25日
5	中村重穂（筆者）	四版	明治38年6月25日
6	富山大学附属図書館梶井文庫	六版	明治40年2月20日

4）印刷職人と書いたが、さらに分ければ、文選工、植字工、印刷工などがあり、そのどの段階で相違が生じたかは特定が困難である。
5）熊本日日新聞社新聞博物館館長・丸野真司氏より2019（令和1）年8月5日付筆者宛書簡による情報提供に基づく。

謝辞

小論作成に当たって多大の御支援御指導を賜った長谷川家現当主で長谷川雄太郎御令孫の長谷川英之先生ならびに文子様御夫妻、及び御曾孫の柳澤万希子様に心から御礼申し上げます。また、資料・情報の御提供に与った東京都立中央図書館、印刷博物館、東京外国語大学附属図書館・宮平あ

い様、慶應義塾大学名誉教授・長谷川恒雄先生、一般社団法人日本印刷産業機械工業会総務部・松本広美様、熊本日日新聞社新聞博物館館長・丸野真司様にも厚く御礼申し上げます。

小論は、2019(令和１)年９月14日に開催された日本語教育史研究会（東洋大学）に於ける発表に加筆・修正したものであり、研究会の席上御指導を賜った泉史生先生、横浜国立大学教授・小川誉子美先生、慶應義塾大学名誉教授・長谷川恒雄先生、北陸先端科学技術大学院大学教授・本田弘之先生、東京福祉大学准教授・山口雅代先生にも深甚の謝意を表します。

参考文献

印刷製本機械百年史実行委員会編(1975)『印刷製本機械百年史』全日本印刷製本機械工業会

田中薫(1999)『書籍と活字－明治以降の書籍印刷における活字の変遷に関する研究－』書肆緑人館

東京郵便局編(1907)『東京市麹町区全図　明治四十年一月調査』大倉書店(小論では人文社による復刻版を使用)

中村重穂(2015)「長谷川雄太郎研究序説－『日語入門』諸本校異に基づいて－」『北海道大学留学生センター紀要』第19号　北海道大学国際本部留学生センター　pp.1-23

中村重穂(2016)「長谷川雄太郎研究―『日語楷梯』と『日語入門』草稿の校合に基づいて―」『北海道大学国際教育研究センター紀要』第20号　北海道大学国際連携機構国際教育研究センター　pp.66-80

中村重穂(2017)「長谷川雄太郎研究・その2―日本語史的観点から―」『北海道大学国際教育研究センター紀要』第21号　北海道大学国際連携機構国際教育研究センター　pp.14-33

廣庭基介・長友千代治(1998)『日本書誌学を学ぶ人のために』世界思想社

横山和雄(1992)『出版文化と印刷－活版から電子印刷まで－』出版ニュース社

吉岡英幸(2002)「明治期の語法型教材」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15　早稲田大学日本語研究教育センター　pp.133-146

なかむら　しげほ（元国際教育研究センター准教授）

A study of HASEGAWA Yûtarô (3): Examination of the printing process of the first edition of *"NICHIGO-NYÛMON (Introduction to Japanese)"*

NAKAMURA, Shigeho

Two years ago, a further copy of the first edition of *"NICHIGO-NYÛMON (Introduction to Japanese)"* by HASEGAWA Yûtarô (1865~1904), a Japanese language instructor in the Meiji Period (Late Qing Dynasty), was found in Tokyo University of Foreign Studies Library, adding to the two copies previously known. Although the three copies were printed on the same day, they show differences in letter-shapes as well as missing sentences.

The author conducted a bibliographical examination of the printing process of the three copies in the light of printing technologies in the Meiji Period. The results of the study show that the differences in the copies arose from the setting-up procedures of the various printers in charge and from the use of different type-faces. The author also points out differences in the printing dates and printing companies between the first and later editions and stresses the need for further research on these issues.